

研究と教育と雑務

三 上 岳 彦

夏休みや冬休みの前になると、「いつから休みに入りますか」とか、「大学の先生は長い休みがあっていいですね」などとよく言われる。確かに大学には春・夏・冬とまとまった休みがあるが、それは講義が休みになるということであって、学生にとっては真の意味の休みかもしれないが、先生にとっては決して休日を意味しない。否、むしろまとまった長期間の休日こそ、仕事のかき入れ時といってもよい。

そもそも大学とは、教師にとっては単に教育の場であるばかりでなく、研究の場でもある。さらには、大学行政や学会運営といった“雑務”の場でもある。大学行政にかかわる仕事を雑務などというしかられそうだが、本来大学の教師は教育者であり研究者であって実務者ではないから、それ以外の仕事は雑務と言わせていただくことにする。そこで、大学における教師の仕事を、上記のように、研究・教育・雑務の3つに大きく分類してそれぞれの役割と関係をみてゆこう。

まず研究であるが、言うまでもなく大学における研究は教育と両輪をなすものであって、欠かすことのできないものである。研究活動は、通常大学内だけでなく、広く学界を通して行われる。各自の研究テーマに即して、学会での口頭発表や学会誌への投稿などがなされ、研究成果は公表され他の研究者の目にとまる。しかし、一定の研究成果が出るまでには、それなりの時間と労力が必要となる。地理学の分野では、フィールドワークにともなう時間や経費がかなりかかるが、筆者の専門である気候学の場合にも、データの入手やその分析・処理に相当の時間と労力を傾けなければならない。例えば、古気候復元研究に必要とされる各種の天候記録を収集するために、この数年間、全国各地の図書館・資料館をまわったが、相当の時間と旅費が使われた計算になる。幸いにも、そのかなりの部分は大学の研究費や文部省の科研費でまかなったり、院生・学生諸君の援助によるところが大きい。こうして集められた膨大な資料を分析するには、また相当の時間と労力がかかることになる。分析を通して、ある程度研究成果が出た段階で、学会発表等を通じた研究交流も必要になっ

てくる。国内の学会の場合はそれほどでもないが、海外での国際学会に参加するとなると旅費も相当かかるため、資金面での制約も考慮しなくてはならない。このような訳で、大学における“休み”は、研究の遂行に不可欠の期間といえよう。

さて、大学における教師の仕事として、日常的に行われる教育について考えてみたい。教育といっても、単に週何回かの授業をこなせばよいという性格のものではない。小中高校のように生活指導までも気を配らねばならないということはあまりないが、定期的な講義や実習の他にも、卒論や修論の指導といった不定期の教育も含まれるため、それなりの時間と労力がかかることになる。講義にしても、毎年同じ内容を繰り返すという訳にもいかないから、相当の準備が必要になる。教師の専門外の分野を講義する場合にはなおさら準備に時間が必要になる。筆者の場合を例にとれば、1回の講義に対してその数倍の準備時間をあてているが、なかなか満足のゆく講義は行えない。

最後に、研究・教育以外の雑務に触れておきたい。大学では、教育・研究活動が円滑に行えるよう、各種の委員会組織があり、教師はそれらを分担する責務がある。大学の運営にかかわる管理職的な仕事から、学科内の役割分担に至るまで各種の雑務に拘束される。研究者の本来の任務ではないと言っても、現実には大学運営にかかわる重要な仕事であるため、研究・教育と同様に、相当の時間と労力をさかねばならない場合も出てくる。そのほかにも、大学外での雑務として、学会や政府機関の各種委員会への参加もあり、それ相当の時間をとられることが多い。

こうしてみると、大学の教師は世間一般や学生諸君からは“長い休みと自由時間”が持てる気楽な仕事と見られがちであるが、私自身に限っていえば、毎日が研究と教育と雑務に追われる気苦勞の多い仕事といえそうである。もっとも、自ら進んで（好んで）それらに追われているという面もあるのだが。

（東京都立大学）